㈱　ハピラル・テストソリューションズ
2023 年 2 月 28 日

令和 5 年度（2023 年実施）大学入学共通テスト「日本史 B」について

１．はじめに

「センター試験」から「大学入学共通テスト」に変わり，今回の試験が 3 回目となった。弊社の過去のテスト研究においては，最後に実施されたセンター試験と 1 回目，2 回目の共通テストを比して意見を述べたが，今年は「2023 年共通テスト」について考えていきたい。

「2023 年共通テスト」については，細かな変化はあるものの，試験の構成そのものや出題範囲は，これまで行われた 2 回の共通テストと大きな変化は生じなかった。つまり，大問数は 6，全解答数は 32，であり，出題分野は原始・古代から近現代までを扱い，出題された内容についても政治・経済・文化・外交等がバランスよく出題されている。このことからも，幅広く日本史の知識を学ぶ必要のある試験だということがわかる。

難易度については，昨年度実施試験の平均点が 52.81 点（受験者数 147,300 人／2022 年 2 月 7 日発表）であったのに対し，今年は 59.75 点（受験者数 137,017 人／2023 年 2 月 6 日発表）とあり，平均点だけを比べるとやや易しくなったように思うが，使用されている資料（史料）の種類やリード文の作りも異なるため，明確に「易しくなった」とは言い難い。

今回実施試験についてこれまでの 2 回の共通テストと比べると，「高校生の学習の場面を想定した大問」（例えば調べ学習をしている生徒間での会話やその資料を題材としたもの）の出題が増えたことも，変化した点として挙げられる。これが 6 大問中で 5 問を占めた。また図やグラフ，地図を用いた出題は少なくなり，その分史料の引用が増え，より「史料やリード文の読解」が求められるようになった。

大学入学共通テストの果たす役割として大学入試センターが公表しているものの中に，【大学教育の基礎力となる知識・技能や思考力，判断力，表現力等を問う問題作成】が一番に掲げられているが，本実施試験についても，受験生の日本史の知識に関する理解や，それらを用いての思考力・判断力を問うような問題になっていたと考える。また，「これは資料（史料）を活用しての判断力を問おうとしているのでは」と考えられる問題や，新しい形での「知識の活用」を目指す問題なのではないか，と思う問題があった。それぞれについて，述べていきたい。

２．ポイント解説

２．１．「資料（史料）を活用した問題」

本問題冊子内には多くの史料が引用されているが，特に第 1 問を取り上げたい。

この大問では学校の授業の課題研究のために持ち合った資料についての会話，という設定がなされており，生徒の会話文をベースに，大問内で地図が計 3 点，史料が 3 点，先生の説明が 1 点と，解答のために引用する資料の点数が多かった。本問以外の大問でも，同様に選択肢文の正誤判定のために，複数の資料を読む必要のある問題があった。このため，引用されている史料は現代語に近いものを使用する，わかりにくい表現には注を付す等，読解の

一助になるようになっている点も，日本史の知識だけによらず，目の前の資料を活用させるための紙面づくりになっていると考える。

特に取り上げる第 1 問の問 6 を解答するためには，大問全体……つまり冒頭の会話文から地図，問 3 に使われた「先生の説明」を再び参照する等，選択肢の正誤判定のためにあらためてすべての資料（テキスト）を精査しなおさなくてはいけなかった。選択肢そのものには判別が難しいと感じるものはなかったが，読み解く量が多いことに違いはなく，その分量を短時間で選択肢文の正誤判定をするには，通常の「読解」と異なる情報処理的な力が求められていたと考えられるが，果たしてそれを「思考力・判断力」といえるかというとその判断が難しい。大問の全体把握のために会話文（リード文 A・B）とそれに付随する地図を用いるのは理解できる。しかし，問 3 の資料として出された「先生の説明」まで選択肢の正誤判定に必要な情報とするのは，設問文に「大問全体のまとめの問題」であることが示唆されていたとはいえ，戸惑う受験生がいたのではないかとも推測する。

２．２．新しい形での「知識・技能」に関する出題

ここでは第 3 問の問 5 を取り上げる。本問は中世の京都における経済について問うている。出題の形式としては流通についての模式図を使用し，図中の矢印が何を示すのか，正しい組み合わせを選ぶ問題である。まず共通テストになってから日本史の問題で図式を用いるのは，新しい形式ではないだろうか。加えて，この問いのみ選択肢が 8 つあるのも，選択肢の組み合わせの都合上だが目を引く。見た目としての真新しさもあるが，ここでは「知識の活用の仕方」に注目したい。

設問で確認されている知識は，

①中国から貿易で宋銭や明銭が日本に流入したこと
②貨幣そのものを運ぶのではなく，為替が使用されたこと
③荘園領主への年貢などは現物ではなく貨幣に置き換えて納めたこと
④借上が高利貸であり，酒屋役は税の一種であること

といった，教科書でも取り扱っており，センター試験のころから頻出の内容である。

通常，教科書では本文での説明として①～④を学ぶため，これらは「単語＋説明」の形で覚える（インプットする）ことが多い知識である。しかし，本問ではそれらを新たに図式に起こす（アウトプットの形を文以外にする）ことが要求されており，この点が興味深いと感じた点である。

これまでの「日本史の知識を覚えていたら解ける」問題ではなく，「中世の経済」というくくりの知識を系統立てて，元の「単語＋説明」から発展させて考えることで，「(文以外の)全く別の形にしたとしても，上記日本史の事項が理解できていれば解ける」形の出題になっている。これにより，単純な知識の暗記にとどまらない，「学んだ知識を活用する力」を問うているのではないかと考える。

３．まとめ

第 3 回目の大学入学共通テストについて考えてきたが，冒頭で述べたように，試験そのものの構成（作り）には大きな変化はない。

問題の難易度についても，読解量が増えた一方，リード文の下線部から関連付けて出題された，従来のセンター試験に見られた「知識の暗記で解ける」タイプの問題の難易度を下げることで，全体的なバランスをとっているものと考えられる。

共通テストの【大学教育の基礎力となる知識・技能や思考力，判断力，表現力等を問う】という試験の役割についても，昨年までには見られなかった出題の工夫があったり，複数の資料（テキスト）を横断的に読み取らせるような出題があったりと，その方針に沿うよう，問題は年々ブラッシュアップされている印象である。これまでの共通テストの出題では，「資料を確認していけば（日本史の知識によらず）正解を選べる」というものもあったが，今回の出題では「史料から読み取った情報＋前提となる日本史の知識」のような組み合わせで選択肢が作られており，「資料（史料・グラフ）だけ見れば答えがわかる」または「資料やリード文を読まなくても解ける」といったことはなかった。

その分，受験生に求められている力は非常に幅広く，「日本史の横断的な知識」だけでなく，さらに「日本史的な知識を活用する力」や，「長い文章に対する読解力」，また「多くの史料（資料）の中から必要な情報をピックアップし，整理する情報処理的な能力」にまで及ぶ。これらの様々な力を受験生に問いたいという意図はわからなくもない。しかし，教科書に記載されている学習内容を理解するという，基本ともいうべき日本史の力以外の力を要求しすぎているのではないだろうか。特に選択肢文４つの精査に対して読み直す必要のある文の量が多いこと，また出題の基本になったのが会話文であり，これが数ページにも及ぶことが，受験生にとっては時間配分のしにくさや，必要な情報の読み取りにくさ，つまり問題の解きにくさに影響したのではないかと推測する。例えば読解する分量を減らすことや，読む分量が減らないのであれば（他教科との兼ね合いで難しいかもしれないが）出題する問題数を少なくし，1 問にかけられる時間を増やす等，よりシンプルながらも，出題方針に示されたねらいを達成できるような問題作りが今後なされることを期待したい。

以上